

ポンペが日本で行なった医学講義

—特に内科と外科の講義内容—

大 鳥 蘭 三 郎

日本の医学の近代化は西洋医学の受容と密接な関係がある。このために日本へ渡来して西洋医学を伝えた者は何人か数えられるが、それらの中でもっとも顕著な影響を及ぼした人は一八四八年に来日した Pompe van Meerdervoort (一八二九—一九〇八)である。Pompe はオランダ、ユトレヒトの軍医学校を卒業して海軍二等軍医として長崎へ渡り、同地で西洋医学の各般にわたり医学講義を行なったのである。本論文では、この時の Pompe の講義を松本順が日本語に翻訳した草稿を元として、彼が行なった講義の内容について述べたい。

慶応義塾大学医学情報センターには、Pompe の医学講義を日本語に訳述した「朋氏内科論」九冊と、「朋氏外科学」と題する六冊と、「外科学説」二冊と「朋氏解剖学」と題する二冊、及び「朋氏眼科論」一冊等がある。これらはいずれも写本であるが、Pompe が行なった医学講義を知るにはまことに当を得たものである。ここではこれらの諸篇の中、内科学・外科学に関するものについて論ずることにする。

(日本医史学会理事長)